

8.21

紙屋高雪氏による講演会「マンガは「あの戦争」の体験をどう描くか—この史代『この世界の片隅に』を中心に—」を開催しました。

8月21日にマンガ評論家・ライターの紙屋高雪氏を講師にお迎えして、『この世界の片隅に』を中心としたマンガにおける戦争の描き方についてお話していただきました。

作品のポイントを3つにしぼり、他の作品と比較した分かりやすい説明をして下さいました。

ポイント1

日常生活を細やかに描く

戦争を体験していない世代のマンガ家が増え、戦争を描く際にはとても慎重になっていったそうです。この先生の作品にも下調べをたくさんしたことが伺えるが、それだけではないのがこの作品の魅力。

たとえば料理を描く際にはその過程までもを丁寧に描き、読者に作ってみたいと思わせる様な描写をしているとのことでした。

ポイント2

大切なものと自身の居場所の喪失

呉市が空襲を何度も受ける中で、すずは大切なものを失います。そのことを契機に呉での自身の居場所も揺らいでいきます。

普通の人の居場所さえも奪っていくのが空襲であり戦争であると、この先生は伝えていると、紙屋さんは作品を読み解きます。

ポイント3

自身の居場所の回復

物語は、すずが失ったものを取り戻して戦後の生活に希望を見出して結末となります。

20年8月から21年1月までの物語では、すずが居場所を取り戻していく過程が感動的なエピソードとともに描かれており、紙屋さんは「物語の最後ですずは自らの生きる場所と意味と見出した。」とおっしゃっていました。



紙屋さんは様々な戦争マンガを踏まえた上で『この世界の片隅に』の魅力がどこにあるかを丁寧に解説して下さい、参加者の皆様も新たな発見があったようでした。

紙屋さん、参加者の皆様、どうもありがとうございました。

呉市立美術館

